

○田辺委員 そうですね。

○座長 そうすると、いま、献血確保のために献血ルームとか採血バスで、周辺に声を枯らして呼びかけていますよね。あのようなものをいま、田辺委員が言われている立場から見ての効果、言い続けることの効果というのはどのように評価できますか。

○田辺委員 いろいろあると思います。パブリックな場所で、大声を出して呼ぶということにおいて、人が見て逆に引いてしまうかもしれない。我々のメディアというのは1対1のメディアだったりして、兄貴から言われるように、お姉さんから言われるように、母から子に伝わるように、マンツーマンのコミュニケーションが非常に深く刺さるのです。だから、あのようなところで外に呼びかけることが、逆にそういう人もいますよね、人間というのは、逆に引いてしまうとか。やはり、心の何かを動かすときに、そのメッセージの伝え方というのがあると思います。

○座長 中島委員、現場を預かる立場としていかがですか。いまのお話について。

○中島委員 おっしゃる点はよくわかります。ただ、受け止めるほうの人は様々でして、一様ではありません。私たちもできれば、もう少しスマートな献血の呼びかけをしたいと思ひ、またそれをどうしたものかと悩んでいるところです。

いまご指摘の点、必死の呼びかけに対して反応してくださる方も多いことも事実です。「お前が必死で呼びかけていたから来てあげた」という方もいらっしゃいますので、一般の市民の方々の受け止め方というのは両面あると思っています。もちろんスマートに、必死な形相の呼びかけでない、一般の方に対する働きかけもしたいと思いますが、ある面では血液センターの職員が必死になって一般の市民の方をお願いしているという姿も、それなりに効果があると思っています。ただ、どちらかといえば、そのような姿は少しずつ減らしていきたいと思っているのも事実でございます。

○田辺委員 もちろん、それは当然重要なことでもあります。引いてしまう人もいるでしょう。いろいろな形でコミュニケーションを作って醸成していく必要がある。決してそれが悪いというわけではありません。

○山本委員 いま、ここで出ている話、全部よくわかります。おっしゃることは2人とも正しいし、別に否定する必要はないと思います。それよりも根本的な話をさせてもらいたいのですが、私がいま大学に勝手に呼ばれて、ラジオでも相談ラジオ、毎週死ぬ・生きるの話をしていました。気がつけばPTA会長を5年、おせっかいなものでやりましたら本が出て、それもチャリティー本にして講演で全国を回って、今日も声が枯れています、しゃべり倒してしま死にそうなのです。気がつけばここにも来てくれ、とまたおせっかいですが来ましてフラフラなのです。

要するに、私がリアルに感じていることを根本的に言わせていただくと、個人的には長屋で育ち、近所のおっちゃんとかおばちゃんに育てられたのです。「おせっかい」というものがいかに大切かを身を持って知っているわけです。だからこそ、いま、大人になって、44歳ですけれども、めちゃくちゃおせっかいしています。また、おせっかいが必要な場面

がめちやくちや多いです。

厚生労働省 AIDS 予防財団主催、AIDS の啓発イベントももう 3 年目になって、算出したら 3 億 5,000 万ぐらいかかるであろうイベントを微々たる、何十分の 1、何百分の 1 ぐらいの予算で、全員ノーギャラでステージに上がってくれています。ラジオでも言っていますが” We are シンセキ!” を展開しています。数がないや、FM 大阪から送ってもらわなければいけない。こういうステッカーを作るぐらいに血の話をしています。裏に説明が書いてあります。26 世代、27 世代遡って計算したら誰でも 1 億 3,000 万人の人間が関わってここに生命が宿っているということはすぐに誰でも計算できる。つまり、全員の生命は、実は同じ血液が一滴ぐらい流れているんだよという感覚的な話です。つまり全員親戚なのだ、それを忘れているという話をしています。根本的なわかりやすい話です。

現に、腹立った人に「こらっ」と言ったあと、語尾に「シンセキ!」と付けてみなよと強制的に言っています。そうしたら、「こらっ、シンセキ!!」と言った瞬間にやさしい気持になります。これは全員持っている愛なのです。要するに、愛を強制的に呼び起こすワークショップです。

つまり、何が言いたいかという、どの問題に関しても、エイズだろうが、厚生労働省が抱えているほかの何百とある問題であろうが、この献血の問題であろうが、すべてつながっている話だというのは皆さんお気づきだと思います。先ほどおっしゃいましたように、文部科学省と厚生労働省との間、環境省などいろいろなものがあります。その間の連結がうまく行っていないという、大きな問題を多分皆さんどこかで感じていると思います。それがすぐ変わるわけではない。だけど、出来ることを出来る範囲で、あきらめないでやるというのがいつの時代も私らの使命だと思います。

ならば、その中で文部科学省と新しいつながりを持って、学校の検討会でこういうことも入れられるのだったら未来のために足腰を鍛えるために、これを良い機会に文部科学省に持っていく話があればここで話すべきだと思います。

さらに、400ml の話だって、私は根本的に「国は啓発が下手だな」とずっと思っています。それはなぜかという、コミュニケーションが下手だと思います。それはなぜかといったら誰も悪くない。私たちはコミュニケーションが下手なように、歴史の流れでそうなっているところがあります。先ほど、ぽっとキーワードが出ましたが、私も今、講演をやっている中で「孤独の時代がやってきました、コミュニケーション崩壊の時代がやってきました。原因は誰が悪いか、その答えは歴史の流れです」、つまり誰も悪くないです。先輩たちも 200%リスペクトしています。いつの時代も、すべての人が必死に、命がけで時代を作ってこられました。ならば、先輩方の話もしっかり聞いて、いま私たちが司どっている人間たちが親戚だと思って話し合えないとならない。私はニューヨークにも住んでいましたけれども、日本人はディベートが下手というのはすぐ感情的になったりして、白黒をはっきりさせようとする。今、出ている話は全部必要な話だと思います。ただ、さっきから言うように、すべてつながった話にしてほしいと思います。

具体的に言うと、街頭でワッと啓発している子供たちがいます。私はあれは美しい姿だと思います。あれをし続けないと、ラジオで「なぜ献血をしなければいけないか」、これはおせっかいなのだ。つまり愛なのだ。愛を相手に与えると返ってくるという、愛のお話があまりにも教育界でできていないので、これをワークショップとしてどこの切り口からでもいい。献血からでもいい、環境問題の「マイ箸」からでもいい。エイズの問題からでもいいから、そこから入って最終的には全部おせっかいな、つまり「情けは人のためならず」の話をそちらの方向に向いてまとめて話し合っていかなければいけない話、根本的にそちらを向いて話してほしいと思っています。長々とすみません。

○宇都木委員 性格として非常に似ているのは、骨髄移植と臓器移植の問題だと思います。文部科学省のほうも問題なのですが、厚生労働省の中でももっともっと協力をする可能性がいっぱいあると思っています。複植用臓器提供については、登録の制度を一昨年に設けたのですが、イギリスでは200万人登録しているのが日本では数万人ぐらいの登録しかないのです。

こういうキャンペーンというのはいろいろなところが責任を持つ必要があるのですが、やはりどこか中心的に全体を見渡すところがきちんとあって、きちんと資金を付けてやっていかないといけないのではないかと思います。

たとえば、骨髄移植財団の場合も患者のグループがあって、核になってキャンペーンをしていくわけですが、輸血の場合はその核になる部分がないのだと思います。その辺を少し構造的に考えなければいけないのではないかと思います。

○座長 どうもありがとうございました。いま、いろいろ意見が出ました。この献血キャンペーン、特に高校生をターゲットにした場合、いろいろ出てきた議論を事務局で整理し、次回にまた改めて議論したいと思います。よろしくお願いします。それ以外のことで何かありますでしょうか。

特にご意見がなければ次に移りたいと思います。議事3、「若年層を対象にした献血の意識調査」、これも今年やろうということになって、既にご意見等も伺っている部分があるかと思います。これについていかがでしょうか。

○河原委員 3時から会議がありますので途中で失礼します。「献血推進のあり方」というタイトルで検討されていると思うのですが、やはり背後には血液の確保と量的な、あるいは人的な確保ということがあると思います。そのとき、先ほど申しましたように、1つはいまの基準ではカバーされていない方を献血者のグループに引き入れる。もう1つは、既存の献血者の献血率をいかに高めていくか。それはいままで議論のあったPRの方法とかいろいろあると思います。それからもう1つ、これはこの議論にあまりなじまないかもわかりませんが、量的な確保としたらいまの採血基準で落とされている問診とか、採血基準で落とされている方をどう拾い上げるかという点があると思います。

いちばん最初の新たな献血者の発掘に対しては採血基準と非常にからんでくるかと思えます。先ほどの10代に関しては、いまは16歳から19歳が献血可能年齢層ですが、18歳

や19歳が400mL採れる。16歳とか17歳が200mLしか採れない。後期高齢者ではないですが、前期10代と後期10代とすると、前期10代で果たして400mL採れないかどうかを平成17年度の研究でやっています。その研究結果から言うと、後期の10代の健康面での影響というのはほとんど差がないということが結果として出ています。また、必要に応じて、採血基準の検討をするときにご説明させていただきたいと思います。以上です。

○座長 いまの採血基準については、厚生労働省の研究班でも7、8年前から検討が続けられてきており、ある程度の成果は出ています。したがって、それに関係する資料等も次回のために事前に配付して、検討しておいていただきたいと思います。また、次回、改めて議論をきちんとやりたいと思います。どうもありがとうございます。

○山本委員 偉そうなこと言うわけではないのですが、いちばん懸念しているのは精神的に病んでいる子がものすごく増えているのです。その子らは「人のためになりたい」といって献血に行き倒れるのです。ご存じだと思うのですが、そういう人たちも研究の対象、要するに精神面と血というのは研究されているのですか。

○河原委員 一応、献血の現場に来られた方で、もちろんインフォームド・コンセントを取って、どれくらい気分が悪くなって倒れたかも調べました。そうすると、17歳、18歳と前期の16歳、17歳で差がなかった。むしろ、若いほうが倒れるのが率にすると少なかったです。若いほうが1.何パーセント、18歳、19歳では2.2%が気分悪くなったり倒れたりということがありました。

○山本委員 睡眠剤とか、よく飲んでいる子がいるのです。そういう子はよく「他人のためになりたい」とか。

○河原委員 それは多分、問診の段階でいろいろ排除されると思います。もし、それを隠して献血に行くとそれこそ問題だと思います。その血液というのは、薬が入った血液が輸血されるわけですから。

○山本委員 わかりました。

○座長 そのことについては、また次回、詳細に検討したいと思います。あとは特によろしいですか。それでは議題3、「意識調査」についての説明をお願いします。

○血液対策課需給専門官 議題3のご説明をしたいと思います。資料9から資料10-2を用いてご説明します。まず、資料9ですが、平成17年度に「若年層献血意識に関する調査」というものを行っています。過去の資料ですが、調査結果の概要をまとめたものが資料9です。調査の目的等ありますが、大まかに申し上げますとインターネット調査、客体1万で行っています。献血経験者が5,000人、未経験者5,000人ということで、16歳から29歳の方を対象にインターネットでの調査を行っています。

ごく大まかなことを申しますと、3頁以降、設問に対する回答、そのパーセンテージ等が書いてあります。まず、先ほどもご紹介しましたが、献血未経験者の方のうち26.2%、すなわち4人に1人に当たる方が「献血を知らない」というように回答しています。どの程度知らないということは、設問がざっくりしたものですので濃淡あるかもしれませんが、

献血自体を知らないということかもしれません。これが4人に1人いたということで、かなりショッキングな内容となっています。

今回も同様の調査をやろうとしています。今回の調査についてまとめたものがまず資料10-1、こちらは調査の要綱になります。前回同様、インターネット調査という手法を使い、調査対象が1万客、経験者・未経験者がそれぞれ5,000客ということで、全国で偏りがないように若年層に対して調査を行うということでもあります。大体、調査に1カ月ぐらいは要するということですので、このあとすぐ行き、第2回目は10月下旬を予定していますが、それまでにまとめて結果をご報告したいと思っています。

実際の調査票ですが、資料10-2をご覧ください。こちらは献血未経験者用から始まっています。

まず、前回と同じ設問がかなりあります。これらを比較が行えるということで活かしています。その問については問の下、問1がそうですが、太いアンダーラインが引いてあります。これに関しては、前回のものと結果の比較ができることとなります。それから未経験者、経験者、相互の比較も可能です。前後しますが、資料9の最後の頁に参考として未経験者、経験者のうち、同一の設問について比較をした一覧があります。このような比較も可能であると考えています。

アンダーラインが引いてある資料10-2の問については比較を行うということなのですが、今回の調査から設定した問もごさいます。それがアンダーラインが引いていない問2、問3に始まるものでごさいます。今回、例えば頁で言うと3頁目、未経験者の3頁目、問の17、18あたり、「ご家族が献血している姿を見たことがありますか」、あるいは「あなたのお友だちに献血をしている人がいますか」という設問を設けています。本日の議論の中でも何回か出てきましたが、若年層が献血に触れる機会が減ってしまっているのではないかとということが伺い知れるデータになるかもしれないということで設けています。

献血経験者用のものが5頁目から同様にあります。内容は似かよったところはかなりあります。ただ、経験者については6頁目のいちばん下、問17があります。実は前回もやっている問ですが、「いままでの献血回数は合計で何回ですか」という問です。答えが「1回」と答える方、「2回」の方、それ以上の方とごさいます。2の「2回」、あるいは「それ以上」の方々がいわゆる複数回献血者ということになろうかと思えます。ほかの問とからめ、右側に注釈がありますけれども、例えば問13に「初めて献血した場所はどこですか」という問があります。1の「高校」と答えた方、おそらくは高校の集団献血で初めて献血したという方だと思います。こうした方が複数回献血者になっているか、育っているかが伺い知れるような内容になるのではないかとということで、いくつかの問を関連づけて集計しています。先ほど、新たに設問を設けました7頁の問20、「ご家族が献血している姿を見たことがありますか」とあります。この辺も関連づけて調べてみたいと思っています。ごく雑駁ですが、そのような内容で調査を行いたいと思っています。

この調査については入札によって行う予定です。既に落札業者は決まっていますが、こ

の内容でよろしいということであれば早速調査を開始し、次回の検討会でご報告したいと思えます。以上です。

○座長 これはこれから項目を追加したりなどできるのですか。

○血液対策課需給専門官 本日、ご指摘いただければ可能であると考えます。

○座長 ということでございます。ちょっと量が多いので、パッと見るのは難しいかもしれません。何かお気づきの点、あるいはこういう項目を入れたらどうか、これは要らないのではないかとということがあればお願いします。

○山本委員 先ほども言いましたが、私が現場にいて痛感しているのは心の教育を置き去りにしたことで、いま心が死んでいる世の中が来てしまったということを実に訴えています。つまり、どういうことかということ、国がやることの中にいままでいちばん排除されてきた、例えばこういうことはあなたにとってなぜすることでしょうか、愛についての、心についての質問を載せられないかと率直に思います。

○座長 関連項目か、何かありますか。

○山本委員 ありますか、見ずに言っていますが。

○血液対策課需給専門官 心ということなのですが、単純に「関心がありますか」という設問は前からあります。

○座長 「関心がある」というのは何番になるのでしょうか。

○血液対策課需給専門官 未経験者で言うと問4であります。「非常に関心がある」、「関心がある」、「特に関心がない」、「全く関心がない」となっています。

○山本委員 「何を言っているのだ」と思われるかもしれませんが、私たちラジオDJは毎年、「シュウさん、なぜ生きなければいけないの」、「シュウさん、なぜリストカットしたらいけないの」、「シュウさん、なぜ勉強しなければいけないの」、「なぜ学校行かなければいけないの」、国立大学でも教えていますけれども、まず授業を始める前に必ず聞いていることは「自分に自信のある人、手を挙げてください」と言ったら誰も手を挙げません。「自分に自信がない人」と言ったら自信持って手を挙げる人がいます。

先ほどから言いますが、私は先輩方を200%リスペクトしています。それだけわかっていてほしいのです。その時代、その時代に必要な教育があったと思いますが、今、大人たちに「なぜ学校行かないといけないですか」と聞いたときに答えを考えてもらいたい。もっとシンプルに言います。「なぜ、挨拶をしなければいけないの」と小学生に聞かれたら何と答えますか。「なぜ生きなければいけないの」と聞かれたらどう答えますか。残念ながら、そういうことが私も含めうまく説明できない年代です。

いま、子供たちには大声で「意味わからん」という言葉がはやっています。「意味わからん」というのは、私たち大人が残念ながら子供たちの腹の中に落ちるような答えを説明できない。なぜならば、私らはそのような説明を受けずに学校に通い、勉強し、大学に向かっていった。挨拶も「挨拶しなさい」と言われてしてきた。でも、そのワークショップ的なことで、何となく心の中には答えがあるのです。

ところが、いま、なぜこのようなことになっているかという、私が思うに全てが生命につながっていないからです。すべての理由が生命につながって説明できないことになった頭ごなし教育、それでも私たちは「何くそ」とやってきた年代ですが、社会背景が変わったがために遂に生命が死んでしまっているわけです。去年1年間の殺人事件の半分は、家の中で行われていた。皆さんご存じのとおり、毎日90人が自殺しています。この委員会だからこそ言いたいのは、血の話なので、減っているということが全部つながって当然減るのです、みんな意識低いですから。個人、「自分さえよかったらいい」という世の中が来てしまった。誰も悪くない。来てしまったから、いろんなところで私は1つのエイズを選んで、「みんな、家族の話なのだ。あなたの話なのだ」ということを心から訴えていかないと。人は心を揺さぶられないと行動を起こさない動物ですから、心の話がすっぱり抜けているようではどんどん遠いものになるのです。

現に、私はエイズの啓発教育をやっています。ちゃんと数字もあげています。心に響くお話をし続けているので、アーティストは全員心で動くのでギャラは欲しない。

そして、子供たちも、心から訴えた人間の話は心で受けるので行動に移します。そういう経験をもとに、ここにいらっしゃる方全員が愛があるというのは百も承知、熱さがあるというのも百も承知、ピュアな心があるのも百も承知なので、そこを何とか同時に盛り込んでいていただきたいと思います。

○血液対策課需給専門官 質問ということではないのですが、実はこの調査の中で添付をする資料があります。この調査をインターネットに載せたときに見やすくご覧いただけるような形を考えています。

この資料の10-2の一番最後の2枚をご覧ください。「けんけつちゃん」を使った「献血にご協力を、若い皆さんの熱い友情を」というメッセージなのですが、1頁目の下、「献血はなぜ必要なのか」ということで簡単に触れています。3つ目のコラムで、「献血は病気や怪我で血液を必要としている他人のために、見返りを求めず血液を提供することです。健康な人のボランティアによって、多くの人の生命が救われているのです」とご紹介をしています。いまの状態では、これが答えになるかと思えます。

○座長 その程度のことで、山本委員が言われていることはカバーできそうですか。

○衛藤委員 この3月まで、付属の中学校・高校の校長を兼務していました。やはり、子供たちがリストカットをしたりとか、自分自身を大切にできないと思っているのではないかと。「自分に自信がない」と先ほどおっしゃいましたが、自分自身を大切に思う気持が育っていない子供が予想以上に多い現状が確かにある。そこに届くような質問というのは確かにない、いきなり献血の話から始まってしまう。例えば、「あなたがいちばん大切に思っていることは何ですか」とか、そういったところから入っていくことは1つのやり方ではないか。それは結局、他人のために役立ちたいという気持があるのかということから入って行って、献血のほうに行く。そこでちょっと補助の階段を付けてあげないと答えにくいところがあるのではないかと。完璧なお答えになっているかどうかわかりませんが、私の感

じていることはそういうことです。

○山本委員 いまおっしゃることもベリー・グッド、「いいな」と思います。一言、それこそワン・フレーズに実は子供たちはビビッとするのは。例えば、「いまから質問に答えてもらいます」のような文言の中に、一言心が震える、あるいはこれを書いた大人の人たちの愛情のこもった一言が入るだけで向き合い方が違うのです。それがそれこそ設問の中に入らなくても、「ご協力ありがとうございました」というよりは、人と人とが愛で結ばれていて、その愛に参加してくれてありがとう。わからないですよ。そこに愛とか、人間は助け合っていかなければいけないとか、そのようなことは学校で言っているけれども上滑りしないような、大切な言葉を入れてほしい。それが私たち、ここで話し合っているメンバーの人間としての、真剣な未来を考えている大人としての愛の仕事だと思います。

ここで「愛」とか言うとぶっ飛ぶと思います。しかし、私たち大人が奥さんに「愛しています」ということを見せられないから、子供たちは「愛しています」と言えないのです。先ほどもちらっと出ていましたが、私たちが家の中で献血の話をしないと、当然、献血は近くはないのです。といて、しない人が悪いのではないのです。伝わるように、うまくプレゼンテーションをしなくてはいけない人たちができていないというだけで。ならばそういう人たちを、私もいっぱいおせっかいしていますが、それが必要だなと痛感しています。もちろん昔の先輩など、後ろ姿でその愛を届けてくれていたので良かった。いろいろなものが変わりました。背中を見ながら「嘘つくな」と教育した人が「ピンポン」、「お父ちゃん、いる？」と言ったら、「お父ちゃん、いないと言え」と言ってしまう。言っていることとやっている事が違うことを子供たちは私に訴えてき続けてきているのです。こういうことこそ、心込めてそういう文言も入れて、何だったら専門の人、コピーライターの人でもここに入ってもらって表現すべきだと思います。

○血液対策課需給専門官 ご指摘ありがとうございます。かなり薄いかもしれませんが関連している問で言うと、未経験者の問5、「どういう用途に使われているか知っているか」という内容、あるいは問25、「若い方が献血に協力する気持ちを高めるためにはどういうことをすればよいと思うか」というように、間接的に答えとして現れることは期待しているのですが、いまおっしゃられたようなことは、どちらかというメッセージとして入れなければいけないということはよくわかります。先ほど申し上げた資料の中での工夫もできるかと思いますので、そこは検討させていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

○座長 まず、山本委員にもう少しこれをきちんと読んでいただき、こういう設問を具体的にしたほうがいいのか。いま、事務局からあった話を入れることでいいのか。あるいは、もうちょっとこういう考え方があるのかということ具体的に、早急に事務局に伝えていただだけませんか。そして、事務局と私とで検討させていただいて、一任いただいてアンケートをやるということでご了解いただけるとよろしいかと思うのですが、いかがでしょうか。

○山本委員 いかがですか。



○堀田委員 とても必要なことだと思います、心のことを入れるというのは。

○大平委員 山本委員のお話を聞いて大変感銘させられたところがあります。私も薬害エイズ被害の問題で、血液事業のほうに関与させていただきました。最初のころは心の問題、愛の問題ということで、血液を通して良いイメージを世の中に伝えていく。それが皆さんに共有できるような形にしていきたい。血液からの感染の問題とか、いろいろな問題が社会に対してあまり良いイメージで伝わってなくて、逆に輸血とか、血液事業に対してのイメージがあまりにも、病院関係者の方はどうかわかりませんが、一般的には良いイメージで伝わってなかったなというところがある。小さい子を通じてでも、また若年層を通じてでも、血液という問題を通して人を助け合う。それを社会の中で定着させていくことで、生命を大切にしていくな問題とかにつながるのではないかと思い、参加しています。こういう委員会に慣れてきてしまったせいとか、発言の場がだんだん少なくなってきているのかもしれない。今日は改めて、初心に戻るような思いでお話を伺わせていただきました。

今回のアンケートの中でも、日本が献血で血液を国内需給を行っているというのは世界でも稀な国なのです。そこを何とか世の中にメッセージとして、国が本当は伝えていいのではないかと思っています。それは厚生労働省だけではなくて文部科学省も当然、また、内閣府等でも、国が全体としてこの血液の問題を皆で考えているというメッセージを国民全体に伝えるには、やはりそのくらいの規模で伝えていかないと、山本委員の言われるような、血液のいいイメージとしての社会への定着がなかなか進んでいかないと。このメッセージの中に日本の希有な世界でのシステム、血液の助合いのあり方というのを是非盛り込んでいただけたらと思うのです。それがもし不可能だとしたら、日赤とかそういうところも大々的にキャンペーンをして、日本のいいところ、また、これが本当に患者さんたちを救っていること、そして、企業としても社会貢献として大変立派な活動であることをわかっていただけるような、そういうことにつながればと思うので、可能であれば是非盛り込んでいただきたいです。

○宇都木委員 これは意識調査ですので、あまり最初に操作をしてしまうと国民一般の意識の調査にならないと思います。ですから、これは難しいかもしれませんが、積極的に働きかけた後にするアンケートとこのままのアンケートをやってみて、その比較でもってどのようにしたら社会を動かせるかという調査も考えられるかと思っています。

○山本委員 いまおっしゃるのはよくわかるのですが、やはりそのバランスですね。私は表現が下手くそなもので、例えば、具体的に設問だったとしたら、何故今日は受けようと思われましたかとか、その中に、Aは暇だった、Bは前から興味があった、Cは普通の。最後の1つに人のためになりたかったか、あるいは、何か心に引っかかったような薄めのあるものと、私が言っているのはそういうことですね。そんな極端にメッセージするようなことではありません。つまり、私たち自体が、献血は何のために必要かというのは、先ほど言ったように、すべての理由は命につながっている、愛につながっているという意識があるはず。もしなかったら、えらいことだと思います。その中で、問19番に自分

の献血が役に立ってほしいから、輸血用の血液が不足していると聞いたから、健康管理のためになるから、輸血を受けることがあるかもしれないから、過去に家族や友人らが輸血を受けたとあります。

この中に、役に立ってほしいというのが、これは薄めですが、もう1個、例えば愛のためと入っていてもいいですね。つまり、先ほど大平委員も言ったように、私はどこを切っても、要するにワークショップ的に、みんなが何か気づいていく。それは何かというと、私の言い方だと、つながっていかねばいけない、支えていかねばいけない、みんな大切な親戚だと、そういうものに意識が低いことが大問題なので、その意識を上げるためにはそれに気づいてもらわなければならないと思います。つまり、献血が低いのも、人のこと知らんとか、要するに情報が入らないのですね。それで心を揺さぶらない。ところが、人間は心が動いたら、献血の意味がわかれば誰でも献血しますよ。だって格好いいことなのだから。自分の生き様として格好いいし、自分が嬉しいし、最終的にはそういう当たり前のことを何となく意識が上がるようなものにして欲しいなと思います。

○座長 いま宇都木委員の言われたことは、そういうような、心的なことがアンケートに対してある方向づけをしてしまうのではないかという指摘ですね。

○山本委員 いや。だから、チョイスがあるわけですよ。

○座長 ですから、今回はこの調査について、そういう項目を入れるべきか、あるいは、もしやるならば、そういうことを含めた別の調査をやるほうがいいのか、ということだと思います。その辺についてはどうでしょうか。それから、アンケートの取り方についても、同じテーマでも、設問が最初にあったのと後にあったのでは回答の内容がかなり変わってくるという調査結果もあります。いま事務局から指摘がありました。もし入れるのならば、文章的なものとして関係しているところに、いま山本委員が言ったことを設問として最後に入れるかとなると、宇都木委員の言っているような懸念は、0とは言わないまでも大分薄まる可能性はあるかと思いますが、その辺についてはどうお考えですか。

○山本委員 そうですね。バランスだと思います。ただ1つだけ、勘違いしてほしくないのは、私に言わせると、例えばこういうもののアンケート調査に、愛が盛り込まれなかったからこそ問題が大きくなっていると、はっきり言っておきます。つまり、愛は別、こういう意識調査はそういうものを排除したものにしなればいけないという、私からすればそういう考え方が既にナンセンスなのです。すべては愛につながっているものです。先ほど言ったように、私は無宗教です。

○宇都木委員 普段から愛とか助合いとかに意識を持っている人間はどう動き、そういうことについてあまり関心のない人間はどう動くか、というような調査ができればいいんじゃないかと思っています。

○山本委員 そういう調査ですか。

○宇都木委員 そういうことだと思います。

○山本委員 つまり、愛に意識がないと、愛について意識が薄い人を調べるのですか。

○宇都木委員 そうではなくて、献血に対する意識の調査としてです。そうすると、どういふところにキャンペーンをしていったら数値が上がっていくか、そういうための調査で、これ自体はキャンペーンではないから、キャンペーンの資料だと思います。だから、これがキャンペーンの資料となるのに適切かどうかについて、まだ議論の余地が十分あると思いますが、これ自体でキャンペーンをしてしまうと結果が動いてしまうと、そういうことです。

○山本委員 わかります。難しいですね。

○花井委員 1つは山本委員、こういう形でラジオで話していただけると思うと心強いです。バイアスの問題ですが、やはりどんなアンケートも観察者が必要な時点で必ず文脈に依存するので、完全に排除できません。宇都木委員が言ったように、観察者の視点でそれをある程度分析できるアンケートをするのと、観察者が観察者然としてることによって駄目だという山本委員の意見は、実は本質的な問題に立ち入っていると思うのですが、今回は具体的な話なので、あまりそこに立ち入らず、いま聞いていて思ったのは、献血における愛というものは、やはりそれをいただける贈り物のもらい手がいるのですね。もらい手は、例えば大平委員と私が常にユーザーであるわけですけど、ユーザーの姿が見えない。今回のアンケートでも、自由記載欄の最後のところで、どうやったら若い人に献血をしてもらえるようになりますかと、直接こちらの本音を聞いてますね。それと同時に、例えば、献血によって治療をしている患者さんに対する、献血した人のメッセージをいただいてもいいかと思います。そういうのが1つあってもいいかと。輸血する側というのはやはりどこか見えてないのが、献血ではずっとあって、骨髄移植とか臓器移植の場合だったら、もらっている患者さんがCMの画面に出て来たりしますね。献血だけは患者さんの姿は出てこないのです。私たちは集団なわけですが、やはり血液をもらっているという、私の血液を渡してこれを受け取る、贈与されてるわけですね。贈与された命の宝物を受け取る側と、この伝達の感覚が献血のイメージの中にあるのかな、いや、あるのかもしれませんが、そのところ、ドナーとレシピエントがどうつながってるかの意識というところの質問項目があればいいかと思いました。今回はこういう形になっているので、自由記載欄に、私の個人的好みとしては、一度献血によって治療を受けている患者さんに、何かご意見等がありましたらお書きくださいと、問29の後に1つつけていただくのはどうですか。そのことによって、献血者がもらい手、レシピエントを人間としてどう見てるのかという意識がわかり、キャンペーンに役立つかという点が1点です。

それから、もう1点は細かいことなのですが、今日田辺委員もいて、ふと思ったのですが、キャンペーンを知った媒体、ラジオと書いてあります。実はFMとAMはいまやメディアとして全然違うのですね。だからFMと言ったほうがいいのではないですか。ラジオというメディアと、中波とFMは完全に違うメディアなのです。そういう意味では、それを分けたほうがFMも協力しやすくなるかと思います。それが2点目です。

それから、業者に委託するようですが、これは調査した厚生労働省が出るのですか。出

るのであれば、むしろ調査の内容よりも、調査主体の厚生労働省の調査にかける思いが出ていないと。最初に何かコピーを入れたりすればいいのかもしれませんが。厚生労働省、献血のために愛をかけて調査するのにご協力くださいという立派な。それはわかりませんが、そういうことも可能かと思いました。以上、3点目です。

○座長 他の委員の方々、いまのことについて。

○川内委員 発言の機会をうかがってしまして、最後になって恐縮です。このアンケートについては、設問自体は大体こんなものでいいかと思います。これまでに数々の委員からご意見が出ているように、でき得ればこの設問を終えた後に、これまで献血を受けた方々のメッセージとか、また、ここでも最後ですが、献血者のプロフィールへのリンクを張ってますから、献血に対する国としてのキャンペーンのリンクを張るとか、そういったところで、すべての設問の後にいろいろな普及、啓発を図る素材を載せていけばいいかと思います。そうすれば、座長もおっしゃられるように、アンケート自体のバイアスも減少するのではないかと思います。

それと、意識調査とは直接関係ないですけども。私の課は血液事業と臓器移植対策を所管しております。そこに入って感じるのは、臓器移植や骨髄移植であれば、レシピエントの方々のメッセージが強力に国民の方々に映ることから、ドナー側の意識の啓発に非常に役立つのではないかと思います。一方、実は献血というのは、通常の献血も日常の医療の中で粛々淡々と行われているので、なかなかメッセージ性が薄いところがあります。ここは地道にやっていくしかないのですが、やはり山本委員が言うような、善意、愛というものを繰り返し訴えていくことが必要ではないかと感じました。

○座長 他に。

○住友委員 まず、この調査についてですが、まさかこの「若年層献血意識調査」というスタートで入るわけではないですね。実際に調査するときには、厚生労働省のお願いとして入って答えていただくのだと思いますが、そこを丁寧に説明して調査に協力していただくスタイルをとったらいと思います。あと、あまりそこにメッセージを入れてしまうのはどうかと思いますが、この調査の目的と、こういうことが問題なのでいま調査してますと入れていくと思うので、そこでもある程度メッセージを入れられるかというのが1つあります。それと、特に未経験者用の調査の中で、設問5で、いきなり「献血は患者さんに対する輸血だけでなく」と入っているのですが、そもそも輸血の血液が献血でしか確保できない日本の状況を知っているのかどうか、おそらく献血そのものさえ知らないという方が多いと思いますので、もう少し基本のところから聞いたほうがいいのではないかとというのが率直な印象でした。逆にそういうことを質問として入れることで、この調査が知らない方に教示していくとか、教育的内容になるかと思いますので、盛り込んでいただいてはかがかかと思いました。以上です。

○座長 大体よろしいですか。では、簡単にお問い合わせいたします。

○山本委員 1つ聞いてて、ああそうか、私はメッセージを盛り込もうと思われていると

思ったのですね。私はメッセージを盛り込むつもりはないです。つまり、ここに書いてあるけど、献血に関してどのような広報媒体を見たことがあるかというところに、テレビ、ラジオ、新聞、街頭での呼びかけとありますね。この中にラジオという項目がなかったとしたら、ラジオできたやつは落ち込みますね。少ないのだ、相手にされてないのだ。つまり、どういうことかという、項目の中に、もちろん役に立つと思ったからとか、そういう表現はありますが、はっきりと、愛だと思いましたというのが入っていい時代ではないかということです。つまり、いまの若い子は愛についてもものすごく意識が上がってきているというか、愛がないからですよ。全然届いてないから。だから、いま子供たちがどんな大人が響くかといったら、愛を訴える大人です。愛を表現できる人です。ベタベタな、関西人だからベタと言いますけど。「お前を愛してる」という言葉を聞きたがっているのです。わからないから、背中では伝わらないから。だから、最後でいいから、項目の中に「愛のため」と入っている、大人たちが作った若年層献血意識調査なのか、そういうのが入らないのならば、やはり若年層が見たらそこで距離を感じます。入ってない「その他」になっている。その他の中に「愛のため」と書かなければいけないと。この感覚は伝わらなかったら伝わらないのですが、メッセージではないのです。

○宇都木委員 むしろ問うほうの側にそれがあると、そういう問題なのでしょうね。

○山本委員 愛の云々というキャンペーンを張るでしょう。そこには愛のとか調子よく出てきますが、こういうところになると突然消えるとか、つながってなかったり、なにかお飾り餅みたいにこちらへ伝わらない、キーワードとしての愛という感じがします。作ってる物すべてに、作ってる側の大人たちのものが欲しいと、率直に思います。それを言う立場で来てるし。

○座長 意識を込めるのではないと、メッセージを込めるのではないという意味ですね。

○山本委員 メッセージではないです。だって、これは愛でしょう。

○座長 わかります。

○宇都木委員 例えば、自殺を考えたことがあるとか、助けられた記憶があるとかか、人を助けた記憶があるとか、そういう事柄を持っている人間かどうかで答えが大分動くことがあるのかもしれませんがね。何か確かにそういう事柄をアンケートの中に入れられると分析が効くかもしれませんが。

○座長 それでは、後半で議論が大分盛り上がったのですが、そろそろ議論も出尽くしてきたのではと。いずれにしてもこの調査はやるべきだと思います。したがって、山本委員をはじめとして、江藤委員、あるいは住友委員ですか、こういう問題があるのではないかという発言をされた方々にいま一度お願いしたいのです。具体的に、どの部分にこういう設問を入れるかということ事務局に、今週中でもいいですか。間に合いませんか。

○血液対策課需給専門官 明日中にいただければ大変助かりますが。

○座長 是非明日中にお送り下さい。

○山本委員 問18に、愛のためと入れておいてください。

○座長 それをどこの部分に、どういう設問で、どういう選択項目として入れるかを具体的に指示してください。

○山本委員 いま場所がわかりました。問 18 と問 19 です。

○座長 設問だけはできるだけ早く決めて、調査に入りたいと思います。そうでないと次回に間に合いませんね。

○山本委員 そうですね。

○座長 そういうことでよろしいでしょうか。是非ご協力いただきたいと思います。具体的に設問という形で、そのまま場合によっては印刷できるような形でお願いしたいと思います。それは事務局と私で検討して、最終案にさせていただきます。よろしいですか。ご了解いただけますか。では、是非そういうことでお願いしたいと思います。

本日用意した議題はこれで終わりました。あと、この会の次回以降の運営等について、事務局より日程等の案があればお話しいただきたいと思います。

○血液対策企画官 本日は熱心なご討議をいただき、本当にありがとうございました。次回の日程ですが、事前の調整の結果、10月29日水曜日の午後1時半からお願いしたいと思います。会場については、現在探していますので、決まり次第ご連絡申し上げます。次回ですが、本日ご議論いただいた意識調査を実際に行いまして、できましたらその結果をまとめて、次回10月29日に資料と共にご報告したいと思います。

それから、本日途中でご退席になりましたが、河原委員のほうで、採血基準のあり方に関する研究を行っていただいておりますので、そちらの状況について河原委員から詳しくご報告いただきたいと考えています。また、採血基準のご議論をいただくときには、欧米等の基準、あるいは、献血の状況がどうなっているのかというのも重要な情報かと思しますので、その辺の情報をお持ちの方も、参考人として出席をお願いし、ご説明をいただければと思っております。事務局からは以上でございます。

○座長 次回は、本日議論した、献血の推進に関するいろいろな問題、それからもう一つ、先ほどご説明申し上げたように、若年者、特に16、17歳の採血基準のあり方が若年者献血に大きな影響を及ぼしているのではないかとと思われることから、非常に重要なポイントだと思います。これについては既にいろいろなデータが厚生労働省の研究班等で出されていますので、その資料は事前に配付できると思います。事務局と相談する必要もあるかもしれませんが、できるだけ事前にその資料をお送りしたいと思いますので、是非目を通していただいて、コンパクトな議論ができるようにご協力いただきたいと思います。それから、世界の状況がどうなっているか、これも大きな意味のあることだと思いますので、適当な参考人に来ていただいて、お話を伺いたいとも考えます。そういうことで、次回は10月29日の予定のようですので、是非またご参集して、ご尽力をいただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。